

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名 孫 旻喬

論 文 題 目

近現代日本の大衆文化における「ロボット」の表現研究
——『R.U.R.』から『鉄腕アトム』まで——

論文審査担当者

主査	名古屋大学准教授	古田 香織
委員	名古屋大学教授	涌井 隆
委員	名古屋大学教授	星野 幸代
委員	椙山女学園大学教授	田所 光男

論文審査の結果の要旨

論文の主旨

チェコの劇作者カレル・チャペックが、戯曲『R. U. R.』で初めて「ロボット=robot」という造語を用いた。その『R. U. R.』が日本で初めて上演されたのは1924年であり、その後、欧米の実物の「ロボット」が来日したのは、1930年代前後のモダニズム時代のことであった。一方、戦争が始まると、欧米からもたらされたロボットの登場は少なくなったが、戦時中の日本の冒険小説や子ども漫画にはロボットの姿を確認することができる。そして、戦後は、手塚治虫が創り出したロボットである“アトム”が登場した。本論文では、そのような日本のロボットと欧米のロボットとの間には明確な差異があること、つまり、欧米のロボットの背後には、欧米の創作者のロボットに対する警戒と不安が隠されている一方、日本のロボットに関する表現や日本人が作った実物のロボットからは、ロボットに対する警戒はほとんど感じられず、代わりに、ロボットに対する好意ないしは憧れが見られるのだと論じている。このような日本人のロボットに対する好意的な態度はどこからきたのか。

本論文は、ロボットという言葉を生み出した『R. U. R.』が日本で初めて上演された1924年から、戦後の最も有名なロボット作品『鉄腕アトム』の連載が始まった1951年までの日本の大衆文化に注目し、1920年代から1950年代の間、日本人のロボットに対する認識や表現がどのように変容したのかについて、各時代のロボットのイメージやロボットに関する言説を分析し、日本人のロボットに対する好意的な態度がどのように構築されてきたのかに論及したものである。

論文の構成と主な内容

序章においては問題意識が述べられ、第1章では、「ロボット」に関する先行研究が整理され、ロボット表現の系譜や個別の研究について詳しく紹介されており、ロボットの身体イメージが誕生した歴史的背景についての研究の必要性が指摘されている。

第2章では、まず日本の近代化の過程における「ロボット」のイメージが整理され、「ロボット」という言葉の意味がどのような経緯を経て定着したのかが明らかにされている。

第3章では、20世紀初頭の芸術運動における「機械」に対する賛美に注目し、1930年代前後の日本で紹介された「機械芸術論」に関する言説を整理し、日本のアバンギャルド芸術とロボット表現の関係を分析し、ロボットの機械的な身体にはどのような「前衛性」が認められたのかを明らかにしている。

第4章では、田河水泡作『人造人間』(1929)を戦前のロボット像の代表として取り上げ、本作品に登場するロボット・キャラクターである「ガム」の身体表現が分析され、ガムには当時のマスメディアで紹介されたロボットの驚異性と、アバンギャルド芸術が賛美した「機械美」が同時に見られるということが指摘されている。

論文審査の結果の要旨

第5章では、『少年倶楽部』をはじめとする子ども雑誌における「科学」の扱い方に注目し、「科学もの」がどのように戦争色に染められていったのかを整理し、「科学もの」は、「戦争」という苦しい現実から、読者・作者の両方の目を逸らさせ、科学力によって築き上げた未来を空想させる空間を提供したのだと分析されている。

第6章では、「日本SFの父」と呼ばれる海野十三のロボット作品を分析例とし、海野作品が表現したロボットの身体像の特徴を明らかにし、海野が目指したのは、「国のために、戦争のために戦う軍国主義的な身体」であったと指摘されている。

第7章では、戦時中に創作された子ども漫画に注目し、子ども漫画におけるロボットのイメージを取り上げ、子ども漫画における「機械的な身体」・「近代的な身体」について述べられている。

第8章では、手塚治虫のデビュー時の書き下ろし単行本に描かれているロボットに注目し、初期のマンガ作品に見られるロボットの表現の変容を分析して、戦後「代理としてのロボット」というイメージが登場したことが指摘されている。

終章において、全体のまとめと結論、課題について述べられている。

本論文の評価及び審査の結果

本論文において、「科学」が「軍事」へと変質するその起点が1931年の満州事変であるということ、1938年の「児童読物改善ニ関スル指示要綱」が空想の排除を奨励したにも関わらず、却って少年読物は科学的未来への空想を提供していたのだと指摘した点は特筆に値する。また、ロボット表現における「多面性」から「科学性」・「軍事性」へ、そして、「代理者」へという変容についての分析は独創性に富み、この時期の日本文化の特質を特徴づける重要な指摘である。口述試験においては、本論文は「科学」が一つのキーワードとなっているにも関わらず、「科学」そのものについての理解が弱く、問題の本質が見失われてしまっているという問題が指摘され、その点で改善する余地はあるが、当時の少年の思考形成という観点から、「軍事親和主義」へと議論を展開した点、戦時中の「大衆文化」という枠組みの中での「ロボット」表現の分析を行いつつ、日本におけるモダニズム、大衆雑誌の変容、歴史的背景について詳細に渡って調査し記述することに取り組んだ姿勢と意欲は高く評価された。さらに口述試験においては、戦間期はロシア革命、世界恐慌、ファシズムの下で労働が焦点化された時代であり、こうした背景を踏まえてロボットと人間の関係性を検討することが望ましいと指摘され、また、日本人とロボットとの関係性についてもさらに周辺分野へと視野を広げた分析が望まれたが、これらは今後の可能性を裏付けるものである。

以上の審査の内容を踏まえ、論文と口述試験の内容を総合的に判断した結果、本論文は博士学位請求論文としての水準を十分満たしているものと判断し、「博士(文学)」の学位を受けるに十分な資格があると審査員全員一致で認められた。